



■新作顔ハメ講談『桜井の出逢い』（陸奥賢 記）

■舞台：桜井（大阪府・島本町・某商店街）

■登場人物

①父・和田信太郎・・・元・映画看板絵師。映画産業の斜陽で失業する。以降、飲んだくれに。70歳。

②母・立花松子・・・映画好き。信太郎が描いた映画館の看板を見て、絵の才能に惚れて結婚。失業後は酒におぼれた信太郎からDVを受け、別居。離婚。ひとりで細々と画材屋をやって息子を育てる。現在はガンで入院中。趣味は絵を描くこと。68歳。

③息子・立花淳之・・・島本町の商店街・画材屋の2代目。母親の跡をついだ。地域活性化のため楠木正成と正行の「顔ハメ看板」制作を思いつく。父を憎んでいる。42歳。

■前座で

講談「桜井の別れ」の説明。いまはあまり知られていないので。楠木正成（父）と楠木正行（息子）の親子の美談であることを強調すること。

■あらすじ

①父（飲んだくれの天才看板絵師）と母（画材屋。ガンに犯されている）と息子（画材屋の2代目。商店街活性化部長）の関係性の説明。

②息子が入院中の母に商店街活性化のことで相談する：「商店街の広報部長になって、テレビをみていたら顔ハメ看板の特集をやっていた。タモリも来る。本も出てる。いろんな人が来る。顔ハメ看板は凄いい。それで地元のシンボルである楠木正成と正行の『桜井の別れ』をテーマにした顔ハメ看板を作って、地域活性化したい」

母「誰に顔ハメ看板を描いてもらうつもりや？」

息子「専門業者に頼むつもり」

母「おとうちゃんどうやらか？昔は素晴らしい映画看板を書いていた。映画があかんようになって、失業して、飲んだくれになってもうたけど。腕は確かや。おとうちゃんに頼んでほしい」

息子「え？なんで？あんなアル中なんかに頼むんは、絶対にいやや」

母「母の今生の最期の願いや。私は自分がガンやというんも知ってる」

息子「わかった（しぶしぶ承知する）」

③父親と会う（居酒屋で）

すでに父親は酒を飲んでいる。

息子「かくかくしかじかで、あんたに顔ハメ看板の絵を頼みたい」

父「んなもん、しるか！」

息子「母親の最期の願いやぞ」

父「しるか！おれは天才絵師やぞ。顔ハメ看板みたいなしょうもないもん描けるか！」

息子「アル中め！いまも手がふるえてるやないか！どうせ描かれへんねんやろ！？」

父「なんやと！ほならやってやろうやないか！」

息子「やれるもんならやってみろ！」

父「あとで吠え面かくなよ！」

ケンカ別れするが、父、結局、顔ハメ看板をやることになる。

④父親、顔ハメ看板を描く。その様子を息子が見に行く：父親、アル中で震えていたのに、絵筆を握ると、ピタリととまる。見事なタッチ。神業。見事なもの。息子も、なにもいわずに立ち去る。

⑤除幕式：顔ハメ看板の御披露目の日。春。桜が美しい。町長や商店街の会長などが沢山くる。いよいよ顔ハメ看板が出てくる。緊張の一瞬。白い布を取って絵が公開されると、みんなが観て、絶賛。これはすばらしい。拍手喝采。みんなが顔ハメをハメて、嬉しそうに帰っていく。

誰もいなくなった夕方。息子が顔ハメ看板を見ていると、父親がひょっこりやってくる。感謝の礼を述べる息子。そこに母親も来る。父と息子に顔ハメを薦める。父子一緒に顔ハメ看板にハメる。母親が 2 人を撮影をする。父と息子が泣きながら「父よ！」「息子よ！」と言い合って仲直りする。

⑥この父と子の感動話が地元の新聞に出て評判になり、「島本町の顔ハメ看板に顔をハメると良いご縁になる」というウワサ話になる。いろいろな人がやってくるようになって、地域活性化となる。商店街がうるおって、自然と画材屋にも客がやってくる。画材屋さんが儲かると、そのお金で母親がよい病院にうつることができた。いい病人に移ると、名医が見つかってガンも治り、結局、親子 3 人でまた再び仲良く暮らしましたとき。めでたしめでたし。

「桜井の別れ」ならぬ「桜井の出逢い」の講談でございました。